

Century Press

さらば国分寺書店のオババ

スーパーエッセイ Part 1

「本の雑誌」編集長

椎名 誠



スーパーエッセイ・パート1
さらば国分寺書店のオババ

 Century Press

定価 780円

著 者 椎 名 誠
発 行 者 冨 田 耕 作

発 行 所 株式会社 情報センター出版局

東京都新宿区四谷2-1
四谷ビル 〒 160
電話 東京 (358) 0231
振替 東京4-46236

落丁本・乱丁本はお取替えいたします

© Makoto Shiina 1979

廣済堂印刷

0300-101010-3458



Century Press

さらば国分寺書店のオババ

椎名 誠

日本財団支援

笹川良一記念文庫

財団法人日本科学協会

情報センター出版局

目次

I

国鉄はいまわしらの眼を
まともに見ることができるか

.....9

検札 ● 10

業務連絡 ● 15

乗り越し料金 ● 17

電気ドリル声 ● 23

カラオケ超人願望 ● 34

最終電車 ● 39

Ⅱ

日本の“本官”たちは
いったい何を話しておるのか

.....45

交通整理 ● 46

国分寺駅前派出所 ● 52

南口ロータリー ● 54

国分寺書店 ● 66

ビールとラーメン ● 70

忍者影丸 ● 80

東京地方検察庁 ● 89

毒だみが原のアリ地獄 ● 99

派出所の会話 ● 102

Ⅲ

死ね！ そこいら中の
制服関係の皆様

.....111

IV

うに寿司の ジャーナリズム的摂取方法

深夜の激闘 ● 112

憤怒の底流 ● 117

地獄の路線バス ● 120

甲子園はクソ劇画である ● 127

うるさいのだ ● 135

オババの正体 ● 143

公務員の算数 ● 150

制服人間粉碎同盟人民戦線 ● 157

生牡蠣とローストビーフの問題 ● 172

涙の目標管理 ● 178

産業界タマタマの法則 ● 186

痴のおかまのマイルドセブン ● 193

V

夕陽にむかい背を丸め
痛恨のチーズケーキ九六〇円の春

.....
203

車掌の本分 ● 204

国分寺カバ ● 215

オババの運命 ● 219

本文カット・いしい
ひさいち

I

国鉄はいまわしらの眼を

まともに見ることができるか

検 札

とつぜんこういうことを申しあげるのもなんですが、わたくしはだいたい、鉄道関係の人、というものはあまり好きではないのです。

好きじゃない、というよりも敵視している、といったほうがいい。

それがどういう理由および精神構造によるものなのか、レポート用紙六枚以内にまとめて、金曜日までに提出しろ、などといわれても困るのだが、これはアレですね。問題の本質をずーっと探っていくと、意外にその根は深く、円満な解決策をひきだすには相当な困難と努力が予想されるのではないかと、目下のところはまあこのように思っているのである。

たとえばこういうことがある。

なんとなくぼんやりしながら乗っている電車のドアが突然あいて（連結のところのドアね）、「エー、ごめんどうですが乗車券を拝見……」と言いつつ入ってくる『鉄道関係』の人がいます。

そのときおれはいつも「ハッ」として、その鉄道関係の人を見てしまうのである。

これはもう、たとえ切符をもっていようが定期券をもっていようが、条件反射的に「ハッ」として見てしまうのね。

するとまあ、たとえばその鉄道関係の人と眼があう場合があるでしょう。

「ハッ」として見つめる眼にはやっぱり無実ではあっても、とっさのことなので、

「あっ、オレ、キップちゃんと持ってたかな？」という一瞬のとまどいや、

「オレの定期券まだ切れてないだらな」という一瞬のローバイがどうしても出てしまうわけです。その「ハッ」とした一瞬にね。

すると、その「ハッ」とした視線をです、鉄道関係の人は、わりとこう度のつよい眼鏡の奥でスルドク「ガキッ」と受けとめるのがわかるわけです。その一瞬の「ハッ」とした視線を一瞬のうちに「ガキッ」と受けとめた、というかんじ——これはなんというかね、手ごたえ、という言葉があるでしょう、つまりあのかんじだからエート、これはやっぱり「眼ごたえ」というのでありましょうか。

ま、とにかくその「眼ごたえ」があったナ、とわかったときのこちら側の気分というのは、じつにもう必然的緊縛大全的に自虐的にならざるを得ないのね。

たとえば、その鉄道関係の人の眼はオレの一瞬のウロタエ視線をガキッと受けとめたとき、やっぱり一瞬のうちにこたえているわけなのです。

眼が言ってるわけ。

「おうー、そうかいそうかい。いま行くからね、行くからね。動いちゃいけないよ、あまりロコツに動くとあたりに恥ずかしいでしょ。じつとしてなきやいけないよ。いま行くからね、行

くからね」

というようなことをその一瞬の眼ごたえのなかで語っているわけなのです。

しかし、そうはやすやすと敵の思惑通りにいくわけではない。その一瞬の「ハッ」というのと「ガキッ」というものとのスルドイ接触の直後に、おれの頭のなかではひとつの動かしがたい事実が明確になっていくのである。

「大丈夫、絶対大丈夫だった。おれの定期券はあと半月も残っているし、それはいま、おれのこのコートのポケットの中にしっかりと携帯されている。じつところ、おれの下半身のぬくもりのなかで、けだるい午後の存在感にふくらんでいるのだ」

といった、なぜか必要以上にブンガク的な表現をともなつて、おれの四肢はしだいに無実のよろこびにふるえていくのである。

そして、人間の心というものはあまりにも小さくあまりにもジャンバルジャンである、そしてさらにモンテクリスト伯である、と思うのだが、おれの眼光はしだいに正義と真実に裏うちされた復讐の炎にあやしく光り、皮肉と余裕がないまぜになったぎこちなくも複雑な片頬ピクピクのはほえみさえも浮かんでくるのであった。

「さあ来い。どこからでも来い。しかし来てみておどろくなよ。残念ながらこちらはちゃんと通行証持参だ。運転免許証だってもっているんだぞ、さあ来いてめえ、いつでも来いってんだ！」



余裕は自信を生み、自信は闘争心に体あたりをくらわし、闘争心は憎しみにドロップキックをあげせる。

そうしておれはコートのポケットのなかでじっと定期券をにぎりしめながら、眼鏡の奥からコマメに視線をトバしつつ、しだいに着実に接近してくるその鉄道関係の方をじっとこう待っているのである。

しかし、それにしてもなんつうのかね、その対決の一瞬を待っている嗜虐的気分というものは、これはもうじつに言葉乱れちゃうけれど、マゾヒスティックとサディスティックをまぜこぜにして、大阪日日新聞と日活ロマンポルノをちりばめ、アブドラー・ザ・ブッチャーの怪鳥的悲鳴とともにぶるんぶるんとこねくりかきまわしたような「やったるでエ、しばいたるでエ、いてまうでエ、あっあっあっ」というようなかんじになっているのね。

そしてもう、じつところ、その瞬間をお待ち申しあげている、という気持というものはじつにもうたまんないのね（オレちょっと異常かなア）。

ま、いいや。

とにかくそういうような状況に置かれて、あともう

数人でおれのところまでやってくる、いよいよ来る！　というときに、オギクボー、オギクボーなんていうカン高い声でわめいている駅について、その鉄道関係の方はあわてて降りていってしまふ、というようなことがよくあるわけです。

あれはやっぱりその鉄道関係の方の、とくに検札Ⅱケンサツ関係（ウーム、やっぱりカタカナで書くとなかなか迫力のあるお仕事をしているわけですね）の人というのは、その担当区間というのが決まっているのだからか。

よく見ていると、そんなふうに業務なかばであわてて降りていってしまうケンサツの方々というのがけっこう多いようなのだ。

しかし二人の検札が組になって左右にわかれ、反対側からスリ抜けて逃げられないように用心深く攻めてくる場合があり、このような時はずっと最後の車輛までまんべなく追いつめていつているようである。

ずっと昔、まだ日本のいたるところに小川というものが存在していた頃、小さな流れをせきとめて何人かで用心深くアミをひろげて攻めこんでいったひそやかなコーフンが、あのタッグチームの検札にも感じられるのだ。

そして、こういうタッグチームの場合は、すっかり全部「取り調べ」がおわると次の駅に着くまでたいがい二人してなんとなくニヤツきながらヒソヒソ話をしていることが多いようである。

あれはやっぱり二人で、

「どうだ調子は」

「オレは五人逃がしちゃったけどよ、品川の手前で四人ばっかしまとめてひっつかまえたらしい、これが八〇円区間のゴミばっか」

なんていうような「報告会」をしているのではないだろうか。

すくなくともあのニヤつきかたというものは「秋季、特別車輛点検運動における12のチェックポイント」について、お互いに指差確認しあっている、というような風景にはとてもみえないのである。

業 務 連 絡

考えてみるとおれたちは毎日、鉄道関係の人々に定期券を見せてやったり、キップをもらったりして、かなりひんぱんにかれらと接触しているのであるが、そのわりにはあの人々の実態というか、その赤裸な真実の姿というものをあまりにも知らなすぎる——のではないかと、思うのである。

たとえば、おれたちはよくホームの上で「業務連絡」というものを聞かされることがある。あの業務連絡というものはたいがい、